

# 終わりになき「移行」の途上で？

ブルガリア農村におけるライフコースとジェンダーの再編

松 前 もゆる

## 1. はじめに

最近のヨーロッパ、あるいはEUは、経済と統一通貨ユーロの危機、さらにはEU そのものの危機（この原稿を書いている2013年1月時点で、例えば、イギリスのEUからの脱退の可能性が取り沙汰されている）まで、「危機」という言葉で語られることが多いが、1993年のマーストリヒト条約の発効により「欧州連合（European Union）」となって以降、EUは、加盟国の拡大と統合の深化を続けてきたと言える。2004年5月にポーランド、チェコ、ハンガリーなど10か国、2007年1月にはブルガリア、ルーマニアが加盟し、とくにかつての「東側」、旧社会主義諸国へ領域を拡大してきた。それと同時に、EUは、単一市場の形成を目的として人や物、サービスの移動障壁を取り除くことを基本理念とするため、拡大後、「東欧」から「西欧」への人の移動、出稼ぎや移住が急増し、受け入れ国側からは、しばしば問題視されていることも確かである。

例えば、朝日新聞は2006年10月21日付で、「東欧から出稼ぎ急増」と題し、2004年に新たに加盟した国々から経済状況のよりよい国への移動が予想以上に増加し、イギリスでは受け入れ態勢が追いつかずに問題が生じているという内容の記事を掲載した。そして、以前からの加盟国の大半が、新規加盟国からの移動に対し、職種や人数の制限を設けた、または、制限を検討していると報じている。その後、2007年に加盟したブルガリアやルーマニアからの労働移動に対しても、移民の急増から自国の労働市場を守る目的で認められた猶予期間を利用して、多くの加盟国が移動制限を設定した<sup>1</sup>。

しかし、そうであっても、ブルガリアから国外へ出稼ぎに行く人たちは少なくなく、それは、1997年秋以来、筆者が断続的に調査を続けてきた中北部ロヴェチ県の村々でも実感される。なかでも、2000年以降は、中年層の既婚女性による単身での出稼ぎが顕著になったとされ<sup>2</sup>、それは調査地においても同様である。ブルガリアにおいて、労働移動は必ずしも新しい現象とは言えず、歴史をさ

---

<sup>1</sup> 加盟から7年間、2年-3年-2年ごとに見直しをしながら猶予期間を設けることができると定められた。ブルガリアからの労働移動に対する2度目の見直し（2011年）後の状況は、旧東欧諸国やスペイン、ギリシア、イタリアなどが制限を撤廃した一方、イギリスやフランス、ドイツなどは、主として受け入れる職種や人数等の制限を継続している。

なお、ヨーロッパにおいて、共通の国境管理と域内の自由移動を定めたシェンゲン協定も、この地域の人の移動と関連している。ブルガリアとルーマニアはこの協定への2012年までの加入を目指していたものの、2013年に延期されている。

<sup>2</sup> Angelov, Georgi et al. “Bălgarska trudova migratsiya: Ima li smisäl ot ograničeniya v ES?” (Policy Brief, 2011.11), Open Society, Sofia.

[http://ngobg.info/bg/documents/49/429bg\\_trudova\\_migracia\\_bg\\_final.pdf](http://ngobg.info/bg/documents/49/429bg_trudova_migracia_bg_final.pdf)（2013年1月10日閲覧）

かのほれば、この地がオスマン帝国の統治下にあった18～19世紀から、石工や大工、移牧、野菜栽培農民など多様なかたちの出稼ぎが見られることが指摘される<sup>3</sup>。しかし、近年の出稼ぎの増加と、女性の、とくに単身での労働移動は、人びとにとって、1989年末に社会主義体制が崩壊して以降20年余に生じた「新しい現象」と感じられており、本論文でもとくに注目したい。

以下では、筆者が調査を続けるブルガリア中北部の農村の事例をとりあげ、社会主義から市場経済への移行を人びとはどのように生きたのか、その間、何が変わり、何が変わらなかったのかを、「新しい現象」としての女性の出稼ぎをめぐる力学を中心に検討し、明らかにしたいと考えている。そのために、まず次節では、女性たちの労働移動に対しどういった視角からの議論がありうるか、関連する先行研究を検討する。そして、彼女たちの国際移動が、当該社会における女性のライフコースのなかでどう位置づけられ、容認されているのか、ライフコースとジェンダーの再編という観点の重要性を提示したい。そのうえで、第3節では、調査地において、社会主義時代に想定されていた人びとのライフコース、そしてジェンダーとライフコースの関わりについて述べ、第4節以降、それらが体制転換を契機としてどう変化したのか、ジェンダーとライフコースの再編について、とくに出稼ぎを選択する女性たちとその周囲の語りと実践に注意を払いながら、検討していきたい。

## 2. 働くこととジェンダー：ブルガリア女性の国際労働移動への視角

国際労働移動について、人類学や社会学の立場からの研究動向をレビューした小ヶ谷は、以前の研究においては、「移民を受け入れ社会にどのように統合するか」に重点が置かれがちであったこと、また、移動者のジェンダーに関心が払われてこなかったことに対し、ある時期から批判的な議論がなされ、新たな移民研究が蓄積され始めていることを指摘している（小ヶ谷 2007）。

前者については、もっぱら「統合の対象」として移民を分析する視点は、多様化・複雑化する移動の現実によって、転換を迫られているという。現代の移動・移住をとらえるべく、「2つの社会を同時に生きる」移民に着目した「トランスナショナリズム」の議論が台頭し、また、これまで見過ごされがちであった送り出し社会の状況、移動する人びとの戦略や主体のありようにも目が向けられるようになった。

一方、後者の「移動とジェンダー」の観点については、出稼ぎの主体を暗黙のうちに男性としてきた時代から、1970年代から80年代初頭の移民女性への関心の喚起を経て、1980年代半ば以降のジェンダー視点からの分析へと深化した。こうした議論は、「女性」を一枚岩とせず、人種やエスニシティ、階層などの差異とジェンダーとの交錯を問題とすることにつながり、「移民の女性化」と言われる現実を前に、近年、数多くの研究が蓄積されている。これらの研究のなかには、国際移動が「女性化」する構造をマクロレベルで分析するものから、コミュニティや家族・世帯、そして個人の意識やアイデンティティなどミクロなレベルにおいて、労働移動をめぐるジェンダーがどのように作用しているかを検討するものもある。小ヶ谷は、国際移動研究におけるジェンダー分析は、「一連の新しい

---

<sup>3</sup> この地域の、オスマン統治時代から近代国家成立後の20世紀にいたる労働移動のありようを検討した研究として、寺島 1994、木村 2012、Hristov 2012などがある。

移動研究の立場に連なり、中でもそれを牽引するような立場にあると言えるかもしれない」（小ヶ谷 2007: 241）と述べているが、フィールドから国際労働移動を考える際にも重要な視角と言えよう。

では、東欧からの国際労働移動に関する研究動向は、どういったものであろうか。これらの国において社会主義時代に国境を越える出稼ぎがなかったわけではないが、体制転換以後の流出の急増を受け、先行研究も近年に集中する。しかし、そのため、当初より新たな国際移動研究の流れを受け、ジェンダー視点からの分析も目につく<sup>4</sup>。また、前節でふれたように、急増する東欧からの移民が受け入れ社会で「問題化」したこともあり、ヨーロッパ各国の研究者が、自国の課題として受け入れの現状と課題を研究するケースが多くあるが、送り出し社会の状況や移動する主体に着目した研究も進められつつある。

例えば、以前から国際労働移動を研究してきたモロクワシチは、1990～92年にドイツとの国境を越えるポーランドの人びとに行ったインタビュー調査にもとづき、とくに短期の移動に注目し、人びとのトランスナショナルなネットワークと実践、潜在能力について報告している（モロクワシチ 2005）。彼女が調査したポーランド女性たちは、当時のポーランド国民に認められたビザなし滞在の期間を利用し、ドイツで家事労働や高齢者ケアなどに従事して収入を得る一方、その仕事を何人かの女性で数ヶ月ごとに交代するローテーションを組むことにより、自国の家族のケアも続けていた。こうしたローテーション・システムはまた、住み込みのメイドの場合に起き得るような、雇用主との関係の「問題」をある程度防ぐことができ、さらに、移動を繰り返すことでポーランドでの生活が維持可能になることから、「移動のなかへの定住」が生じているとモロクワシチはいう。そして、ヨーロッパにおけるこうした移動の新しいかたちに着目し、トランスナリズムをジェンダー分析することによって、「トランスナショナルなアクターの『下からの抵抗』潜在能力を強めもし、あるいは制限もするような、権力構造とジェンダーヒエラルキーの重要さが明らかになる」（モロクワシチ 2005: 155）と指摘している。ただ、「制限」に関連して、「移動のなかへの定住」が可能なのは、いくつかの条件が整ったときに限られるのではないかという疑問も生じる。実際、筆者の調査するブルガリアの村からも、数ヶ月ごとのローテーションを組んでイタリアで高齢者のケアをする女性もいたが、それは国境を越える出稼ぎのごく一部であり、また、ブルガリアが EU に加盟して以降、彼女は途切れることなくイタリアで働いている。つまり、制度や経済・社会状況の変化にしたがって、人びとの戦略と実践も変わるのであり、ますます多様化・複雑化する移動のありようについて、個々の事例に即して検討する必要がある。

さらに、送り出し社会の状況に目を向けるならば、国境を越えて移動する人もいれば移動しない人も多くいるのであり、送り出す側のコミュニティにおける「働くこと」全体のなかで労働移動がどう位置づけられるのかも、重要な観点であろう。社会主義が人びとに「労働者」であることを求める体制であった以上、市場経済への移行プロセスにおいて、人びとが「働くこと」にいかなる変化があったのかは、体制転換後、大きな関心を集めてきた。そのなかで、ジェンダーの視点からの議論においては、社会主義時代に女性たちが社会進出を果たした東欧諸国で、一転、専業主婦志向や伝統回帰の

---

<sup>4</sup> 例えば、Anthias & Lazaridis 2000 や、Passerini et al. 2007 などがあげられる。

傾向が見られることがしばしば指摘される<sup>5</sup>。その背景には、ポスト社会主義期には、育児休暇や子育て支援、公的保育等に関わる家族政策関連予算が減少し、女性、とりわけ母親たちが働き続けるための環境に変化が生じたこと、さらに、不安定な社会状況のもと、「男が稼ぎ、女が家庭を守る」といった伝統的役割規範が主張されるようになったことなどがあると言われる。一方で、東欧のなかでも、ポーランドやチェコなどではカトリック教会が中心となって伝統的なジェンダー規範を強調しており、正教会が主流であるブルガリアとは事情が異なるとする議論もある。さらに、本論文の後半で見るように、女性たちの態度は多様であり、実際に妻が専業主婦となり、夫の収入だけで暮らしている家庭は限られていることもつけ加えておかなければならない。

また、体制転換後の「労働」をめぐる状況とその変化に関しては、アメリカの人類学者ダンによる興味深い問題提起がある (Dunn 2004)。彼女は、1990年代のポーランドにおいて、アメリカの企業が買収するかたちで民営化した食品工場でフィールドワークをおこない、民営化のプロセスは、単に仕事や経営のノウハウを移植するだけではなく、「人間とは何か?」という問いに関わると指摘した。というのは、社会主義時代、人びとは何よりもまず、「労働者」として想定されたからであり、市場経済下で「労働」の新たなマネジメントを通じ、個人を選択しリスクを負う者に転換することが、ポスト社会主義期の移行の中心であった。しかしまた、ダンによれば、以前から工場で働いてきた従業員たちの民営化への適応を可能にしているのは、生産計画に応じた臨機応変な対処や培われてきた人間関係など、社会主義時代の経験であったという。

なお、ここで問われている「人間」や「労働者」は、「性別がない (sexless)」存在ではない。次節で詳述するが、社会主義時代に「人間」はまず「労働者」であることが前提であったが、性別による差異がなかったわけではない。そして、人の一生も、単なる「人生」ではなく、「男性の人生 (ライフコース)」「女性の人生 (ライフコース)」が想定されてきたと言える。以上を考えあわせるとき、市場経済への移行期を人びとがどう生きたかを議論するために、社会主義政権下で形成された「人間」像およびライフコースが、体制転換後、女性による国際労働移動などの新たな実践の影響を受けつつ、どのように再編されつつあるのか、ジェンダーの視点から詳細に検討するというアプローチが浮かび上がってくるように思われる。既に述べたように、東欧からの、とくに女性の単身の国際移動は、1990年代以降の比較的新しい現象で、実際に1人の女性のライフコースのなかで出稼ぎ経験がどう作用するかといった検証は、むしろこれからの課題かもしれない。ただ、筆者が1997年以降、とくに2000年以降は出稼ぎを主要テーマのひとつとしてブルガリアの村で継続的に調査を行ってきたなかでも、既にいくつかの知見が得られており、以下、その事例をとりあげながら、体制転換後のブルガリアにおけるライフコースとジェンダーの再編について考えてみたい。

---

<sup>5</sup> 体制転換後、東欧やソ連における専業主婦 (回帰) 志向は、メディアなどで時にセンセーショナルにとりあげられたが、こうした、いわゆる「伝統」的な性別分業や家族主義が強調される傾向については、その後、社会的・歴史的背景等からの検討がなされている。例えば、Pine 2002、Saxonberg and Sirovatka 2006などがあげられる。

### 3. 社会主義時代のライフコースとジェンダー

現代のブルガリア農村における国際労働移動について検討する前に、本節では、議論の前提となる調査地の概要と、社会主義時代の状況について述べておきたい。

まず、調査地についてであるが、筆者は、1997年以来、ブルガリア中北部ロヴェチ県の2つの村（仮にA村とB村としておこう）で調査を行ってきた。両村とも、過疎化や高齢化が進むブルガリアの農村部にあっては、比較的人口を保っている村で、これには、「ボマク」と呼ばれ、ブルガリア語を母語としイスラーム的慣習を受け継ぐ人たちが<sup>6</sup>が両村に多く暮らすことが関係している。現在、ブルガリアの全人口のうち8割以上はキリスト教徒（主としてブルガリア正教徒）であり、ムスリムは1割強を占めるが、その大半はトルコ語を母語とするトルコ系住民で、「ボマク」はさらなる少数派と言える。A村の住民は「ほぼ100%ボマク」で、B村では、ボマクとブルガリア人正教徒、ロマが共に暮らしてきた。社会主義時代を通じ、ブルガリア各地で都市化が進み、農村部から都市への人口移動が続いたが、なかでもブルガリア人正教徒の移動が目立ち、ブルガリアのなかのマイノリティであるボマク住民は、進学等の理由でいったん町へ出たとしても、村に戻って結婚し、世帯を形成することが多かった。そのため、体制転換まで、両村の住民数は減少することなく、若年人口も保たれてきたと考えられる。

では、両村の社会主義時代の状況について、さらに詳しくみておこう。ブルガリアは第2次世界大戦後に社会主義圏の一員となったが、村々においていきなり社会主義が確立されたわけではなく、そこにいたるプロセスがあった。例えば、農村地域においては農業集団化、協同組合化がはかられたが、A村・B村はともに山間部に位置し、広大な土地での大規模農業には向かないこともあり、平野部より少し遅れて1950年代後半に集団化が実施された。

また、人民の解放は賃金労働への参加によって達成されるとの理念から、男女ともに「労働者」であること、そのための女性の就業率向上が目指されたが、A村とB村においては、とくにボマク住民たちの間で、当初、女性の世帯外の就業に対する抵抗があったという。あるA村の女性（1940年代前半生まれ）は次のように語る。

「妻を外に出したがる夫はいた。うちの夫もそう。組合からD村〔A村の近隣〕での農作業の話がきて、姉が誘ってくれて、朝迎えのトラックに乗ろうとしたんだけど、夫は広場で大声でわめきながら私をトラックの荷台から引きずり下ろそうとしたの。働きに行くのは認められない、〔送り迎えの〕トラックの運転手たちとふらふらして浮気をするから、って言って。」（強調

<sup>6</sup> 「ボマク」とは、一般に、バルカン半島東部に暮らし、ブルガリア語などスラヴ諸語を母語とするムスリムと定義される。ただ、生活習慣（冠婚葬祭や衣食住）の一部に、この地域において「イスラームに由来する」とされる行為が見られる一方、ブルガリアの近代化や社会主義化のプロセスで、少数派のムスリムに対する同化政策がたびたび実施され、調査地域では、若い世代を中心に「ムスリム」としての自認が薄れる傾向が見られるため、「イスラーム的慣習を受け継ぐ」と表現した。無論、ブルガリアのムスリムが皆同様というわけではない。なお、ブルガリアや近隣諸国における、「ボマク」と呼ばれる人びとへのまなざしと現状については、拙稿（2005）を参照。

および〔 〕内の補足は筆者による。以下同じ。）

この「ふらふらする」という表現は、しばしば女性を外、ことに村の外に出さない理由としてあげられる。仕事以外にも、ある時期（1960年代くらい）まで女子の高校進学が少なかった理由を聞くと、「娘を村外の学校に行かせなかったのは、経済的問題もあるが、女はふらふらするから」などといった答えが返ってくる（義務教育は村内で修了できるが、高校は町にしかない）。「ふらふらする」とは、先の言葉にあるように、恋愛や浮気、子どもができるといったことと結びつけて語られ、もし娘などがふらふらすれば、それは家族の「恥」であったと語る人もいた。つまり、家族、とくに父や夫にとって、女性メンバー（娘や妻）のセクシュアリティを守りコントロールすることが、村の伝統的な性規範において重要であったと考えられる。そのため、女性が父や夫の目の届かぬ「外」、具体的には村外へ出ると、彼女たちの性をコントロールすることが難しくなり、問題も生じ得ることから、社会主義時代の初期には村外での労働や進学に抵抗が示された。

しかし、村における協同組合の成立を契機として、状況は徐々に変化したようである。農業集団化によって、それまで個々に畑を耕し作業をしていた農民たちは、協同組合で耕作や収穫、家畜の飼育などそれぞれの作業をおこなう「労働者」とならざるを得なかったし、まずは村内の土地で協同組合の作業をすることから、女性たちは賃金労働に参画していったという。この時期、組合での農業をあきらめた人たちが、あるいは集団化や機械化によって生まれた農村の余剰人口は、政権による工業化政策の下、多数が都市の工業セクターに吸収された。先述のように、ポマクは村に残る傾向が強かったが、後年、都市と農村のバランスをとるべく、村内や村から通える地域に工場が建設されるようになり、こうした工業関連の職には男性が多く就いたため、協同組合の農作業には、ますます女性の手が必要となった。また、村外の仕事であっても、夫婦でともに働きに行くなど、A・B両村のポマクたちの間でも、次第に女性が外で働くことへの抵抗が薄れていったと考えられる。当時を経験した人たちに尋ねると、男女を問わず、仕事に就いていなければ村の共産党組織から指導があり、「働くことは義務だった」「働かなくてはならなかった」といった声も聞かれ、人びとが、「権利」と「義務」として労働に従事し、「労働者」となったことがうかがえる。

一方で、社会主義時代に女性の社会進出が進んだことは事実であっても<sup>7</sup>、「労働者」は、決して「性別のない」存在ではなかった。女性、ことに母親の労働には一定の保護がなされるべきと定められていたし、また実際には、性別による職種や地位の差異、「男の仕事」と「女の仕事」があったとされる。一般に、女性は繊維産業や看護職、教職などに多く、鉱工業や機械関連など「重労働」は「男の仕事」で、これらの職は比較的賃金も高かった。これについて、A村、B村の人たちは、

「女性が『男の仕事』に就くなどという考え方は、社会主義時代にはなかった。『女の仕事』『男の仕事』があった。」（1960年代後半生まれのB村在住の女性）

<sup>7</sup> ブルガリア全体での数値だが、1952年時点では雇用者の25%、1962年には38%が女性であったが、社会主義体制崩壊直前の1989年時点では、雇用者の約半数は女性であった。この時代を通じて女性の就業率が上昇したことが分かる（Anachkova 1995）。

と述べる一方、

「女性でも可能な人は、トラクターを運転し、道路工事をしていた。〔女性も〕能力があれば、『男の仕事』をしていた。」(1940年代前半生まれのB村在住の女性)

「工場で働いているときに溶接工に空きができたと言って、知り合いが誘ってくれた。『男の仕事』をしたのは仕事があったから。工場で45日間訓練を受けた。給料は良かった。」(1950年代前半生まれのA村在住の女性)

と話す。つまり、実際には女性が「男の仕事」とされる職に就いたり、その逆もあったとは言え、人びとの間には、ある程度「男の仕事」「女の仕事」といった認識があり、「男の仕事」は重労働で賃金が高いという通念が形成されていたことがうかがえる。そして、やや先走って言えば、こうした性別分業についての観念は、社会主義時代の経験を背景として、今にいたるまで継続している。

ところで、この時代、「労働者」となることは、社会的に、仕事に応じて給与を受けとる以上のことを意味していた。「労働者」たちは無論、医療や年金等の社会保障の対象となったし、また、各々の職業の祭りと定められた日には様々な行事が準備されていた。例えば、5月6日は畜産業の日として盛大に祝われ<sup>8</sup>、協同組合では祝宴が催され、畜産に携わる人びとは、一年間の成績によって表彰を受けることもあった。さらに、「労働者」であることで特定の宿泊施設や交通機関が格安で利用でき、旅行や休暇が可能になるなど、楽しみや娯楽も保障されたのであった。先にも見たように、男性も女性も働くこと、社会に「労働者」として参加することが当然として求められると同時に、それに応えることにより、人びとの毎日の暮らしと人生が保障されてきた。

では、社会主義時代に保障された「人生」とはどのようなものだったのだろうか。「労働者」たちの時間は、労働と祝祭日のサイクルとして想定され、そのライフコースの節目は、人生儀礼によってアクセントをつけられた。政権は、1960年代末から70年代以降、年間の祭日や人生儀礼を体制に沿ったものにすべく、その意味づけや内容をめぐって議論し、祭日と儀礼に関するガイドライン(『官報』42号、1978年)を作成した。こうして、社会主義的な祭日と儀礼のシステムを導入し、人生儀礼(命名式や結婚式、葬式、あるいは、当時存在した徴兵の前に兵士を送る会など)に介入していくのだが、<誕生→学校→兵役→労働者(主として「男の仕事」を担う。また、結婚により夫となり、子の誕生によって父となる)→退職、年金生活>という「男性のライフコース」と、<誕生→学校→労働者(主として「女の仕事」を担う。また、結婚により妻となり、出産によって母となる)→退職、年金生活>という「女性のライフコース」が想定されていたことが垣間見える。

こうして社会主義時代に形成されたライフコースの想定や性別分業規範は、体制転換によってどのように再編されたのだろうか。次節でみていくことにしよう。

---

<sup>8</sup> 5月6日は、教会暦で聖ゲオルギオスの日である。ブルガリアでは伝統的に、この聖人を戦い、あるいは農業や家畜の守護者として祝う習慣があり、これを社会主義体制下で再解釈したと言える。社会主義時代の一連の祝祭日には、政権によって新たに創出された祭りと、伝統的祭日を再解釈して制定されたものがあつた。

## 4. 体制転換後のジェンダー再編：女性たちの出稼ぎに着目して

### 4-1 村からの出稼ぎ

1989年末の社会主義体制崩壊後、市場経済への移行過程でブルガリア経済は不安定化し、多くの国営企業は閉鎖に追い込まれるか、民営化して大幅なリストラを迫られるなど、多数の失業者を生み出す結果となった。それは、A・B村においても同様で、近隣の工場は閉鎖、もしくは大幅な縮小を余儀なくされ、協同組合は解体された。山間部に位置する両村では、集団化されていた土地が返還されても、個人による農業では自家消費や副収入にしかならず、専業農家で生活することは困難である一方、村内外の雇用が減少し、男女を問わず、失業した者も少なくなかった。新しい就職先を見つけることも容易ではなく、そうしたなかで選択されるようになったのが、国外への労働移動である。

なお、第1節でふれたように、国境を越える出稼ぎ自体は新しい現象ではない。例えば、社会主義時代にも、A村やB村から国営企業経由でリビアや中東などへ働きに行った人たちがいる。その後体制転換を経て、1990年代には、かつてブルガリアの地に暮らしていたブルガリア系ユダヤ人とその子孫を頼って、イスラエルへの出稼ぎがはじまった。ちょうどブルガリア経済が混乱していた時期でもあり、とくにB村からは、建設業に従事する男性に加え、掃除や飲食店で仕事を求めて、女性たちのなかからも出稼ぎに行く人が現れた。しかし、中東情勢の影響でイスラエルにおいて不法滞在者の摘発が強化されたことから、2002～2003年頃にはほとんどが帰国した。

一方、2001年頃からはEU諸国への出稼ぎが増加する。これには、1999年にブルガリアがEU加盟候補国となり、2001年からは加盟国への渡航に際し、ビザが免除されたことが関係している。移動先で働くには、無論、労働許可が必要であったが、ひとまず観光で入国し仕事を見つけて働く人たちが増えたからである。不法に就労を続けるケースもあった。2000年代のA村、B村からの出稼ぎで目立っていたのは、スペインの建築現場で働く男性たちや、イタリアやギリシアへ農作業（収穫など）のため季節労働に出向く女性同士や夫婦、家族などのグループ、そして、やはりイタリアやギリシアで家事や高齢者のケアを担う中高年女性の単身での出稼ぎであった。後述するように、出稼ぎの増減や移動先は、ブルガリアおよびヨーロッパの経済状況に左右されて変化もするが、この頃からの国際移動の特徴として、女性、とくに中年既婚女性の出稼ぎをあげることができる。

しかし、前節で見たように、A村・B村に暮らすボマクたちの間に、かつて、妻や娘を村外に出すことにも抵抗があったことを考えれば、女性が単身で国外へ働きに行くことがすんなりと受け入れられたとは考えづらい。ブルガリア人正教徒やロマと共住するB村では、1990年代後半からボマク女性たちの間でもイスラエルへの出稼ぎが始まり<sup>9</sup>、ほぼボマクのみが暮らすA村でも、2000年代に入り、一部の女性たちが国境を越えて働きに出るようになる。こうした女性たちの出稼ぎは、伝統的な性規範からは明らかな逸脱ととらえられるが、これを可能にした背景には何があるのだろうか。そして、彼女たちにとって出稼ぎはどのような意味があり、その経験は人生に何をもたらすのだろうか。女性による国際労働移動の選択と経験から、体制転換後にジェンダーとライフコースがどのように再編されたと言えるか、さらに考えてみたい。



## 4-2 国境を越える女性たち～「母たちの出稼ぎ」の背景

以下、本項では、A村、B村から国境を越えて出稼ぎをする女性たちの経験とその語りを具体的に検討し、彼女たちの移動の背景を探っていきたい。なお、とくに断りが無い限り、とりあげるのは、両村に暮らすポマク住民の事例である。

### ①経済危機という理由

まず、ロサ<sup>10</sup>の例をあげよう。彼女は、1950年代前半にB村で生まれた。社会主義時代には近隣の工場で働き、同じ村出身の男性と結婚して、2人の子どもをもうけた。しかし、体制転換後、ロサの職場であった工場は民営化され、段階的にリストラを実施、ロサはその対象となり、2001年に失業した。その後、数ヶ月は無職だったが、2002年5月頃、出稼ぎに行くことを決意する。近くの町でギリシアでの仕事を斡旋してくれるという会社を見つけ、その会社からのツアーというかたちでギリシアに入国した。出稼ぎ先やツアーのグループに知り合いがいたわけではなく、当初からギリシア語ができたわけでもないという。最初の1年程は紹介された農園で働いたが、仕事がなくなり、再び会社から紹介を受け、それ以来、住込みで老人の介護をしている。ブルガリアで失業をした後、ギリシアへの出稼ぎを決断した経緯について、彼女は次のように語った。

ロサ「〔出稼ぎは〕必要に迫られたから。工場をリストラされたから。」

筆者「失業したからということですが、家にいることは考えなかったのですか？」

ロサ「考えたわ。でも、近くに仕事があったらと思ったけれど、なかったから。」

筆者「例えば、仕事に行かずに家にいることは考えなかった？」

ロサ「夫も仕事がなく、病気で年金をもらうようになって、私が家にいるわけにはいかなかったの。息子の援助もしなくてはならなかった。」

ロサの語りにあるように、出稼ぎの一番の理由は、経済状況である。女性の単身での移動に全く抵抗がないわけではないにせよ、「経済危機だから、しかたがない」というコメントは、よく耳にする。

---

<sup>9</sup> B村のポマクたちは、ブルガリア人正教徒と共生してきたことで、A村のポマクとは異なる面があると考えられている。なお、B村のブルガリア人正教徒は、社会主義時代に若年層が都市へ移住したため、現在は高齢化が進んでおり、国外へ出稼ぎに行った人はほとんどいないが、周辺地域のブルガリア人正教徒の間には、イスラエル(1990年代)やヨーロッパ諸国への出稼ぎを選択する人たちがいる。宗教や民族帰属によって、移動先などに違いがあるとの議論もある(例えば、ブルガリアのトルコ系住民が、トルコ本国からの移民を頼ってドイツやオランダなどへ移動する場合等)一方、居住地域の特徴や雇用状況との関連も指摘しなければならない。一例をあげれば、ブルガリア南部で、社会主義時代の主要産業が早期に行き詰まり、新たな雇用が見込めなかった地域においては、筆者の調査地域と異なり、ポマクの間でも、まず若年男性から国外へ移動したという(Deneva 2012)。

<sup>10</sup> 個人名はすべて仮名である。なお、ポマクの場合、1970年頃までは出生時にイスラーム的もしくはトルコ的な名をつけていたと考えられるが、その後、社会主義政権が改名を主導し、ブルガリア的・スラヴ的な名前に変更させた(詳しくは、拙稿 2005)。体制転換後に氏名の回復が認められたが、A村やB村ではその手続きをしなかった人が大半である。彼女たちは出生届時の氏名を忘れていたわけではもちろんないが、ここでの仮名は、現在の住民登録上の名前を考慮した。

また、ロサの話によれば、一定以上の年齢の女性はブルガリアで新しい職を見つけることは難しく、一方で、移動先であるギリシアやイタリアなどヨーロッパ各国では、女性の社会進出や高齢化にともない、家事やケアを担う人材が不足している。さらに、男性が多く働く建築現場など戸外の仕事と異なり、住込みの仕事は住居費（家賃）が不要で、場合によっては正式に契約を交わさずとも（不法労働でも）家内の仕事なので目につきにくいとされ、国外では女性の方が仕事を見つけやすく、稼げると考えられている。例えば、2006年に一時帰国中であったロサにインタビューしたとき、彼女は月に500～600ユーロを稼ぐと話していたが、同時期、ブルガリアで幼稚園教諭として働く女性の月給は300レヴァ（約150ユーロ）であった（当時この女性は、収入の低さから、夏季休暇と有休を利用して、イタリアへ短期の出稼ぎに行っていた）。ブルガリアの経済状況が不安定で収入が不十分ななか、より生活水準の高い国への女性たちの出稼ぎが選択され、容認されてきたと指摘できるだろう。

## ②母親役割の強調

先のロサの言葉にもあるように、女性たちが出稼ぎの理由として多くあげるのは、経済的要因のなかでも、「子どものため」ということである。とくに、子どもがある程度成長し、教育にお金がかかるとなったり、場合によっては（ロサもそうであるが）、息子や娘が結婚し、子ども（出稼ぎに行く女性にとっては孫）が生まれると、子ども夫婦や孫たちの生活を支えるために、国境を越える労働移動が選択される。

ここで、イタリアで働くアルベナの事例を紹介しよう。アルベナは、1960年代前半にB村で生まれた。同村出身の男性との間に2人の息子をもうけ、社会主義時代には工場や幼稚園で働いてきた。しかし、体制転換後、失業が長期化し、90年代後半にはギリシアに短期の出稼ぎに行った後、一時期イスラエルへ働きに行こうとしたが既に難しく、2002年にイタリアへ行くことを決めた。彼女もまた、国際移動を決めた要因として、「子どもたちを教育して、それを支えなきゃいけなかったから」と語る。彼女の場合、数か月前に姉がイタリアへ行っており、その姉が新聞に求職の告知を出して仕事を見つけてくれたという。1人暮らしの高齢女性の介護の仕事であった。アルベナも姉も、当初からイタリア語や外国語が話せたわけではなかった。実はアルベナは、第2節でふれたようなローテーションでの移動を経験している1人である。ブルガリアがEUに正式に加盟する（2007年1月）までは、ビザなし滞在が可能な期間を利用して、3か月经つといったんブルガリアへ戻る生活をしていた。別のブルガリア女性と交代するときもあれば、あまり間をおかずイタリアへ戻り、彼女が不在の間のみ家族が世話をするということがあったようだ。その間、息子たちは大学を受験し、大学生になった。現在アルベナは、当初とは別の家に住み込み、やはり高齢者のケアをしているが（最初に住み込んだ家の女性は亡くなったようだ）、夏季に一時帰国するだけである。2009年に話を聞いた際には、月給は700ユーロで、休日も家にいればプラスアルファで手当てがつくと話していた。このインタビューの際、40代を労働移動をしながら過ごした彼女に、「いつまでイタリアで働くか予定はありますか？」と尋ねたところ、次のような答えが返ってきた。

「私は、あと1～2年は長期的にイタリアで働く義務がある。」

「子どもに十分な教育を受けさせ、大学を卒業させなければならない。」

それから数年が経ち、アルベナの息子たちは大学を卒業し、長男は結婚をして子どもも生まれた。しかし、アルベナはイタリアでの仕事を辞めてはいない。夫もブルガリアで仕事をしているのだが、彼女は、自身の収入から子どもたちの教育費を捻出した後は、長男家族の生活費や孫のため（近年、社会主義時代のような命名式はあまり行われませんが、子どもの1歳の誕生日を盛大に祝うことが慣例になっており、アルベナは孫の1歳の誕生日祝いの費用を負担したという）、仕送りを続けている。さらに最近、彼女が費用を出し、普段は夫が1人で暮らすブルガリアの住居を大幅改装した。

アルベナやロサと同様、出稼ぎは「子どものため」であるとし、母親として移動を選択したことが強調されるケースは数多い。加えて、それは、経済的に子どもの教育や子ども家族の生活を支えることを意味しているから、ある一定以上の年齢層の女性が移動することになる。同時に、アルベナのケースでも明らかなように、若い子どもを持つ母親（この場合は長男の妻）は移動せず、ブルガリアで子育てを担うのであって、出稼ぎをする女性にとっても、ブルガリアで子育てをする若い母親にとっても、自身の選択によって「子どものため」に行動する母親規範が揺らぐことがない。その意味では、女性の単身での国際労働移動は近年の「新しい現象」であり、次項でも述べるように、当該地域のジェンダー規範を揺るがしもするが、一方で、子ども世代の結婚や家族形成を支え、母親規範を再生産するような側面もあると指摘できよう。

### ③世代間の役割分担とセクシュアリティ

上記のアルベナのケースからは、単身で国境を越えた女性は、移動先でケア労働に従事しながら、自身の家族からは離れている一方、ブルガリアにおいて若年層の女性が子育てなどの再生産労働に従事している様子が垣間見える。ロサの場合も同様で、いわゆる「再生産労働の国際分業」と指摘される現象である。このとき、移動する女性たちの夫が、妻の代わりに家事などをすることが全くないとは言えないが、ブルガリアに残る子どもの面倒は主に祖母がみるし、その子たちが結婚した後は、子ども家族の妻が家事や子育てに従事する。つまり、ある女性がブルガリアを離れることにより、彼女が家庭内で行っていた仕事を男性が担うようになるわけではなく、主として世代が異なる親族女性が代わるのであり、家庭内の仕事、再生産労働に関して性別分業に変化が生じているわけではない。

また、ロサは、筆者がなぜ彼女と同世代の女性による出稼ぎが多いのかと尋ねたとき、次のように語った。

「〔ブルガリアでは〕どの企業も自分たちのような者を雇わないから。若い人を求めている。でも、もっと若い人が〔外国へ〕行けば、売春婦になってしまう。年寄りの方が知恵がついているから。」

また、イタリアへ出稼ぎ経験のあるB村の女性（1950年代後半生まれ）も、次のように指摘した。

「彼ら〔出稼ぎ先の人たち〕が、この年代の女性を好む。もしもっと若かったら、より簡単な方法でお金を稼ごうとするのではないかと思っている。とくに、老人や病人の世話をするのは、50歳前後の女性が好まれる。おばあさんやおじいさんが心配しなくてすむように。」

経済状況に関連して既に述べたように、ブルガリアでは新たに中高年女性を雇用しようとする向きは少なく、一方、移動先の各国では、ケアの担い手が求められている。そして、一定の経験を積んでいるとして中年層の女性が好まれ、この世代の女性たちの労働移動を後押しすることになる。

それと同時に、2人の発言に共通するのは、若い世代の女性が国際移動をする方がより問題があるという認識である。前節で、かつてA村やB村のポマクたちの間に、女性は「ふらふらする」傾向があるゆえに、セクシュアリティの保護を理由として、妻や娘を村外の仕事や学校に出すことに抵抗を示す人たちがいたと述べたが、現在の労働移動に関しても、国外に出ることで若い女性のセクシュアリティが危険にさらされる可能性が感じられているようだ。無論、中年女性の単身での移動に同様の問題がないわけではなく、村で噂が立ったり、結果として夫と離婚にいたりするケースもあるのだが、若い世代、あるいは高齢女性が村で子育てや家事を担い、中間世代の女性が母として出稼ぎに行くというかたちで、女性たちが世代間で役割分担をすることで、労働移動が可能になり、同時に、若年女性のセクシュアリティも守られる。40～50代既婚女性、母親たちの出稼ぎは、この地域において、ベストではないにせよ、ベターな選択として考えられているのではないだろうか。

#### ④社会主義経験

女性の単身での国際労働移動に関して、もう一つ事例を紹介したい。それは、近隣のC村の出身で、B村の男性と結婚した姉を訪ねてしばしば村に遊びに来ていたステフカの選択と実践である。彼女はポマクではなくブルガリア人正教徒で、その意味でも筆者の調査のなかでは例外的であるが、大変印象深いケースでもある。

ステフカは1940年代後半生まれで、C村から近隣の町へ移り住み、娘家族と暮らしていた。彼女は2005年に、B村の姉も知らないうちに、突然イタリアへ行ってしまう。それも、ブルガリアで仕事を続け、定年退職した後の決断であった。ステフカは今にいたるまで、住み込みで老夫婦のケアをしており、夫婦と良好な関係を築いているようで、一時帰国もめったにしない。そのため、筆者は主に彼女の姉から話を聞いているのだが、定年退職後に国境を越えた理由として、「自分はまだ働ける」のに「ブルガリアには仕事がないから」と語っているという。ここには、先に述べたように、ブルガリアには中高年女性の新規雇用が少なく、他方、ヨーロッパ各国でケアの担い手が求められている事情が関係している。また、ステフカが出稼ぎで得る収入はやはり「子どものため」、つまり娘家族（夫婦と子ども2人）のためとされるが、一方で、娘もその夫も2人とも安定した職業についており、この数年の間に孫の1人が独立したこともあり、ステフカの送金は「娘がそのまま貯金している状態」のようだ。すなわち、経済的には必ずしも彼女の出稼ぎが必要なわけではないと言える。であるとすると、ステフカの移動の動機は何であろうか。

ステフカの選択には、ひとつには、性別にかかわらず働くことを当然としてきた社会主義時代の経

験が関係しているように思われる。そして、「労働者」であることは、経済的な意味のみならず社会的な意味を含んできたのであり、働いて収入を得ることによって地位や居場所を確保したいという思いもあったであろう。実際、ステフカが一時帰国すらあまりせず、現在まで働き続けているのは、介護をしている老夫婦、とくに妻が、彼女がブルガリアへ帰ろうとすると具合が悪くなってしまうためらしい。社会的に一送り出し社会においてと同様、出稼ぎ先においても一必要とされることに、ステフカは意義を見出しているのではないか。

なお、先にあげたロサやアルベナのケースは、経済的な必要に迫られてだったり、子どものためであったり、ステフカに比べると、受動的かつ自己犠牲的な選択として国際移動をしているようにも見える。ただ、子どものためだけでなく、アルベナのように、収入の一部で自宅を改装・改築し、自分のために家具や最新式の冷蔵庫、洗濯機を買ったとの話も少なくなく、さらに彼女たちは、家族のための出費に対しても、会話のなかで「私が買った〇〇」「私がお金を出した」と、自分の関与を明確に主張する。普段は家族から離れている分、このように主張しながら、家庭内での自分の地位を確かなものにしようとしているのかもしれない。さらに、出稼ぎを経験した女性たちのなかには、小規模ながら店やビジネスを始める者もいる。それによって子どもたちの仕事を創出している場合もあり、これもまた「子どものため」「家族のため」の実践でもあり得るが、同時に、労働移動によって彼女たちに可能性が開けることにも目を向ける必要があるだろう。

#### 4-3 出稼ぎとジェンダーの再編

ここまで、A村およびB村において、女性の単身での国際労働移動が選択される背景を、主に4つに分けてみてきた。40～50代女性、「母たちの出稼ぎ」は「新しい現象」であり、体制転換後の大きな変化と見なされるが、同時に、従来のジェンダー規範—母親規範や性別分業規範のある部分—を再強化するような面もあり、経済危機と母親役割の強調によって、両村で容認されてきた。

しかしまた、女性の出稼ぎの増加は、人びとにさまざまな困惑をもたらしてもいる。その主たる要因のひとつが、女性がより生活水準の高い国々で働くことによって、妻の収入が夫のそれを上まわることである。自身もイタリアへ出稼ぎ経験があるB村の女性にインタビューした際、彼女は次のように指摘した。

「最近、女性が男性の職業をとってしまったように思える。」

筆者「男性の職業とは何ですか？」

「女性たちが男性よりも多く稼いでいる。自分のところもそうだし、半分以上とは言わないけれど、多くの家庭で妻の稼ぎが夫を上まわっている。〔中略〕うちの夫もそうだし、男性が希望を失っているケースがたくさんある。」

第3節で、社会主義時代には性別に関わらず「労働者」であるべきとされたが、ある程度「男の仕事」「女の仕事」といった性別分業の意識も人びとの間に存在し、「男の仕事」の方が重労働で賃金が高いといった通念が形成されてきたと述べた。ところが、妻が単身で国際労働移動を選択した場合、

移動先とブルガリアとの経済格差によって、妻の収入の方が高いという事態が生じる。こうした「逆転現象」に対し、「最近は女が男になってしまった」といったような表現もなされるが、これまでの性別分業規範を揺るがす事態に、人びとは明らかに戸惑っているように見える。その結果、夫たちのなかには希望を失い、アルコール依存に陥る人がいたり、また、離婚にいたるケースもある。

ただ、それでも、前項で指摘したような背景から、女性たちの労働移動は続けられている。離婚という選択はまた、女性たちが国際労働移動によって自身の関係性を取捨選択する可能性を手に入れたことも意味するが、他方、ロサもアルベナも、上記の女性も、ブルガリアに夫がおり、結婚を継続している。女性の出稼ぎによって男性性と女性性の双方が揺らぎ、場合によっては傷つけられるとしても、常に離婚にいたるわけではなく、その時の経済・社会状況のなかで、共同体において、あるいは家族内や世帯内で、それぞれ男性性、女性性をめぐる交渉が行われていると考えられる。

ところで、ブルガリアのEU加盟をきっかけに経済が好転すると、ある種の揺り戻しのような現象も見られた。2007年の加盟前後にはブルガリアへ積極的な投資が行われ、都市や観光地を中心に新しい商業施設や住宅が次々と建設された。2つの村のうち、とくにA村からは、2006年から2009年秋頃まで、数多くの男性が首都ソフィアなどの建築現場へ働きに行っていた。当時、筆者が調査で村を訪れると、建設業の日給の高さがしばしば話題となり、建築の仕事によって「家族を充分養える」と言われるようになっていた<sup>11</sup>。実際、この頃、A村の女性で新たに国境を越えようという動きは少なく、自分は十分稼いでおり、「妻は子どもの側にいるべきで、外国なんかには絶対に行かせない」と語る男性もいた。

こうした出来事は、経済危機とそれに伴う男性の収入の相対的低下によって揺らいだ「男らしさ」を取り戻そうとする動きのようにも思える。裏を返せば、女性たちの出稼ぎは、まさに「経済危機だから、しかたがない」と一時的に容認されていたにすぎず、ジェンダー規範や性別分業を継続的に変化させるにはいたっていないのだろうか。

ただ、このことについて判断を下すには、今後を見守る必要もある。というのも、2008年頃からの世界的な金融不況とヨーロッパの経済危機がじわじわと影響を与えはじめ、ブルガリア経済が再び悪化したからである。2009年秋頃からA村の男たちも新たな建設の仕事を見つけることが難しくなり、男女とも、若い世代も含めて出稼ぎに行く選択が増加した。主として農作業、野菜や果物の収穫などに従事するため季節移動をする人が増え、若い夫婦が、一時的に子どもを祖父母に預けて移動することも少なくない。行き先もフランスやベルギーなど、これまでの主な移動先だった南欧から、ヨーロッパのなかで比較的経済状態がよい国にシフトしている。ソフィアのエージェンシーを通して契約を結び、外国で数か月間仕事をして一定の収入を得れば、一年の残りの期間をブルガリアの村で暮らせるという。

こうして、再び「経済危機」ゆえに、国際労働移動が容認される傾向が出てきた。さらに、短期移

---

<sup>11</sup> 例えば、建築現場の日給は、40レヴァ（約20ユーロ）前後から、技能によっては100レヴァ（約50ユーロ）近くになったこともあり、月収1000ユーロも不可能ではないとされていた。この時期の村の学校教員や役場職員の月給は400～500レヴァ強（約200～250ユーロ）であり、また、イタリアで住込みの仕事（家事、介護）をすると月700～900ユーロになると言われていたから、この時期の建設業の給与の高さが分かるだろう。

動が繰り返され、若い世代も移動するなど、筆者の調査地域としては新しい移動のかたちが現れつつある。それは、若い女性の移動につながり、以前からの A 村のジェンダー規範に照らせば変化と言える一方、女性のグループや夫婦単位での移動が多く、単身に比べれば、女性のセクシュアリティが危険にさらされる場面が少ないとの考えもあるだろうし、また、移動先で妻が料理や洗濯をすることで、夫の「男性性」が保たれるとも考えられる。

今後、ヨーロッパやブルガリアの社会・経済状況が変化するなか、出稼ぎなどの選択と実践の影響を受けながら、ジェンダー規範や性別分業をめぐる、共同体や家族、世帯など各レベルでの交渉は続いていくのであろう。

## 5. まとめ：体制転換後のライフコースとジェンダーの再編

東欧諸国における社会主義からの体制転換後の時期は、しばしば「移行（transition、ブルガリア語で *prehod*）」期と称される。しかしまた、「移行」とは A から B への変化であるのに対し、多くの人びとにとっては現在も先が見えず、この名称は適切でないとの指摘もある。調査地でも、「移行（*prehod*）」と言うけれど、20年間ずっと移行で、どこにもたどりつかない」といった発言を耳にしたことがある。この20年余、繰り返す経済の危機的状況のなかで、女性の単身国際労働移動などが選択され、そのことが女性たちに可能性を開くと同時に、規範の再生産やそれによる「制限」につながっている面もあった。

最後に、こうした出稼ぎ経験が、彼女たちのライフコースにおいてどう意味づけられ、人生に何をもたらすと考えられるか、あらためて検討してみたい。第3節でふれた社会主義時代に想定されていたライフコースは、男性の場合、〈誕生→学校→兵役→労働者→退職、年金生活〉であり<sup>12</sup>、女性の場合には〈誕生→学校→労働者→退職、年金生活〉であったが、こうした人生の青写真は、現在、不安定化している。市場経済への移行過程で、ブルガリア政府は年金制度を改革し、受給資格を精査して開始年齢を引き上げたため、年金受給資格をいつ得られるかは、人びとにとって一大関心事となっている。とりわけ、体制転換後、社会保険料を支払わずに働いてきた人たちにとっては問題で、インフォーマル・セクターでの雇用が多い女性はその対象となりやすいとも言われる。労働移動においても、建設労働に従事する男性たちは、大抵は会社を通して出稼ぎに行っており、社会保険にも加入しているが、住み込みで家事やケアを担う女性たちの場合、雇用主と正式な契約を交わしていないことも多い。雇う側としても社会保険料の負担が減り、働く方もその分収入を得られるため、互いの利害が一致しての選択ではあるが、当初は一時的、短期的な移動のつもりでも、前節でとりあげたアルベナのように、結果的に長期の出稼ぎになれば、彼女たちは社会保障制度からこぼれ落ちるおそれが出てくる。自由主義経済下の世界では、こうした個々の選択は「自己責任」として、リスクも個人化される傾向にあるが、この場合、社会保障に関する選択のしわ寄せは、女性たちにより多くいく可能性がある。

これに対し、出稼ぎに行く女性たちは、自分の収入で家族、とくに子どもの生活を支え、将来的に

---

<sup>12</sup> ブルガリアでは現在、徴兵制は廃止されている。

は子どものケアに期待しているようである。子どもの教育費を出し、家やアパートを買い、職を創出する。そのことによって、彼女たちを送り出す社会や家庭で一定の地位を得て、将来的な居場所を確保しようと試みている。

このことは、体制転換後の東欧で指摘される「再家族化 (refamilialization)」の議論とも関わるだろう。「再家族化」、あるいは家族主義の復活とは、国家が社会主義時代に担っていた役割から後退したために、それを補うべく、家族や親族ネットワークが再強化されることを意味する。上記のケースにおいても、医療や福祉分野への国家の関与は手薄になり、家族間のケア（現在の母から子ども・孫世代へのケアと、将来的な子ども世代からのケア）が期待されるとともに、母親としての役割や子どもの義務など、家族規範が強調される傾向を指摘できる。その意味で、確かに「再家族化」はみられるが、一方で、社会主義時代も、若い母親の就労が、国の保育制度だけではなく、祖父母の手助けによって可能になるなど、制度の不足を家族や親族ネットワークによって補完してきたと言え、人びとの側からすれば、社会主義時代の経験をふまえて現状に対応している。

また、家族規範の強調、家族主義の復活と言うと、家族の一員としての役割が強調され、女性たちの活動は、母や妻（あるいは嫁）としての役割に縛られる、「制限」されるイメージもあるが、同時に、例えば女性たちが労働移動を選択し、家族のなかで地位や発言力を確保する、場合によっては起業するといった可能性があることにも目を向ける必要がある。リスクに対し、家族・親族ネットワークによって対応しようとする「再家族化」の一方、それにとどまらない個人の実践と選択があり得るのだ。

ただ、それは同時に、国境を越えて働く女性たちがどう思っているとも、将来的に子どもが母親たちの意に沿うよう行動してくれるかは未知数であるということも意味する。母親たち自身もそれは十分に承知しており、出稼ぎを続ける女性たちに将来について尋ねると、現状では移動を続けるしかなく、その先のことは、子どもの教育や生活への自身の貢献を口にして、将来は子どもに期待するとしながら、実際には「その時になったら考える」、あるいは「考えないようにしている」と言って肩をすくめたりする。「移行」期—それは終わりなき「移行」なのかもしれないが—に、将来の見通しが立たないまま働き続けざるを得なかった世代は、将来のリスクがより大きいことも考えられる。「移行」期に出稼ぎを選択したことが、今後の彼女たちの人生にどのような影響を与え、どういった課題が生じるのか、またそうしたリスクに人びとはどう対処しようとするのか、さらに検討を続ける必要があるだろう。

なお、この数年、A村・B村で増加しつつある移動のかたち、短期の季節移動に従事する人たちは、ソフィア等のエージェンシーを通し、社会保険にも加入している。彼/彼女たちの移動のありようは、モロクワシチが指摘するところの「移動のなかへの定住」で、移動を繰り返すことで、逆説的に人びとのブルガリアの村での生活が可能になっていると言えよう。ただ、この移動のかたちがこの先主流になるのか、ある社会・経済状況下での一時的なものなのかはまだ明確ではなく、もしこうした移動が継続される場合、送りだし社会のコミュニティはどうなるのか等、検討課題も多くある。移動がますます多様化・複雑化するなかで、村からの国際労働移動の影響を受けながら、ジェンダーやライフコースがどのように再編されるのか、さらに調査を続けていきたい。



## 謝辞

本稿の主要部分は、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所での公開研究会においておこなった報告にそっているが、討論でのご指摘を受け、大幅に手を加えた。ご質問やコメントをくださった出席者の皆様に、あらためて感謝申し上げたい。

## 参考文献

### 【日本語文献】

小ヶ谷 千穂

- 2007 「国際移動とジェンダー—フィリピンの事例から」『ジェンダー人類学を読む』  
宇田川妙子、中谷文美（編）、pp.240-259、世界思想社。

木村 真

- 2012 「移動する農民たち：ブルガリア人野菜栽培農民」『東欧地域研究の現在』柴宜弘、木村真、奥彩子（編）、  
pp.346-364、山川出版社。

寺島 憲治

- 1994 「バルカンの移動労働と出稼ぎ—ブルガリアを中心に」『イスラム圏における異文化接触のメカニズム：  
人間動態と情報 3』pp.79-91、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

松前 もゆる

- 2005 「ポマク：「何者か？」を問われ続ける人々」『講座世界の先住民族—ファーストピープルズの現在 6 ヨ  
ーロッパ』原聖、庄司博史（編）、pp.320-335、明石書店。

モロクワシチ、ミリヤナ

- 2005 「移動の中への定住：ヨーロッパにおけるポスト「壁」移動のジェンダー分析」本山央子訳、『現代思想』  
33(10): 154-171。 (“‘Settled in mobility’: Engendering Post-wall Migration in Europe,” *Feminist Review*  
77: 7-25, 2004.)

### 【外国語文献】

Anachkova, Brista

- 1995 “Women in Bulgaria,” In *Family, Women and Employment in Central-Eastern Europe*, Barbara Łobodzinska (ed.), pp.55-67, Greenwood Press.

Anthias, Floya and Gabriella Lazaridis (eds.)

- 2000 *Gender and Migration in Southern Europe: Women on the Move*, Berg.

Deneva, Neda

- 2012 “Transnational Aging Carers: On Transformation of Kinship and Citizenship in the Context of Migration among Bulgarian Muslims in Spain,” *Social Politics* 19(1): 105-128.

Dunn, Elizabeth C.

- 2004 *Privatizing Poland: Baby Food, Big Business, and the Remaking of Labor*, Cornell University Press.

Hristov, Petko (ed.)

- 2012 *Migration and Identity: Historical, Cultural and Linguistic Dimensions of Mobility in the Balkans*, Paradigma.

Passerini, Luisa et al. (eds.)

- 2007 *Women Migrants from East to West: Gender, Mobility and Belonging in Contemporary Europe*, Berghahn Books.

Pine, Frances

- 2002 “Retreat to the Household?” In *Postsocialism: Ideals, Ideologies and Practices in Eurasia*, C. Hann (ed.), pp. 95-113, Routledge.

Saxonberg, Steven and Tomas Sirovatka

- 2006 “Failing Family Policy in Post-Communist Central Europe,” *Journal of Comparative Policy Analysis* 8(2): 185-202.

【新聞、インターネット資料など】

『朝日新聞』（東京版）2006年10月21日

Angelov, Georgi et al.

- 2011 “Balgarska trudova migratsiya: Ima li smisäl ot ogranicheniya v ES?” (Policy Brief, 2011.11), Open Society, Sofia. [http://ngobg.info/bg/documents/49/429bg\\_trudova\\_migracia\\_bg\\_final.pdf](http://ngobg.info/bg/documents/49/429bg_trudova_migracia_bg_final.pdf) (2013年1月10日閲覧)

## 質疑応答

〈八木〉 松前さん、ご発表有難うございました。それでは、質疑応答に移ります。最初に、ちょっとだけよろしいですか。母たちの出稼ぎというのがメインの話だと思うのですが、ここでは、未婚の若い女性の出稼ぎはあまりみられないですか。

〈松前〉 季節労働の移動の場合があります。友達同士で、女性同士のグループで、のなかには未婚の女性も含まれます。

〈八木〉 それで、イスラーム女性の場合、規範の関係で外で働くっていうのは、インドでもなかなか難しいのですが、やはり、この年齢の女性だからこそ外に出やすいだとか、若い未婚の女性は出にくいとか、そういうことも母たちの出稼ぎと関係しているのかという質問が1つ。もう1つはポマクと呼ばれる人たち、マイノリティでイスラームの慣習を受け継ぐ人たち、その人たちが他のブルガリアの出稼ぎの人たちの形態とどう違うのか、他の地域ではどうなのか、ということを知りたいのですが。

〈松前〉 はい。説明が足りなかったところで、ありがとうございました。まず、最初のご質問なんですけれども、今ご指摘いただいたように、特に長期のケア労働に伴う女性の移動に関しては、未婚ゆえに出にくいということがあります。今日はちょっとそこを引用しなかったんですけども、やはり密室の中で男性、例えば老人にしても、男性といるということは、ブルガリアの規範においても若い女性だと「なにか間違いが起ってしまうかもしれない」とか、あるいは「若い女性だと性産業に従事させられてしまうかもしれない」とか、そういう語りがあって、一方で雇う側も若い女性が自分の家をうろうろしているというのが周囲からあまりプラスには評価されないみたいで、そこで両者の利害が一致して、4、50代の女性の方が子育て経験もあるということも含めて評価されるし、ブルガリアの村の方でも、若い女性よりはという評価の中でこの年代の女性たちの出稼ぎはなりたっているというところがあります。なので、季節労働に関して若い女性が行くというのはグループで行くというところにおいてケア労働とは違うし、短期であるというところでも違うというところがありますね。ただ、実のところは二番目の質問とかかわるのですが、出稼ぎのパターンというのは、ブルガリアの地域的にもエスニシティというか、そういう帰属でも違いがありまして、まず、ブルガリア人の女性たちも男性たちもちろん経済状態が同様ですで行きますけれども、中高年の女性の出稼ぎが目立つというのはブルガリアのキリスト教徒の間でもあるといえばあるのですが、私のフィールドのひとつの特徴だとは思いますが。というのは、同じポマクといわれるブルガリア語を母語とするイスラーム教徒でも、南にたくさん住んでいる。そこは若い人たちが先に出稼ぎに行っていて、未婚ではないのですけれどもだいたい夫婦で、若い夫婦が先に出稼ぎに行くということが目立って、それはなぜかというこの地域はかなり鉱山が多く、主要な産業としてあったのが閉山、あるいは閉山に近い状態に追い込まれて、男性たちの仕事がないという状態が早く来てしまった。なので、若い男性たちが仕事を求めて外にでると。それで、若い夫婦が移住をするということがあって、中高年の夫婦は若い夫婦が外国で産んだ子供たちの世話をするために移動するということが今出てきているので、エスニシティもありますし、地域の事情によってかなりパターンが違うかな、とは思っています。

〈八木〉 わかりました。

〈富永〉 お話のなかで、出生率が低下したということができましたが、その理由をお聞きしてもいいですか？というの、出生率を低下させるというのはなかなか難しいですね。イスラーム社会ですと、なおさらかと思うのですが…。それと EU に加盟したことと出稼ぎとの関係について、この2点をお願いします。

〈松前〉 そうですね、出生率はイスラーム教徒の間ではもう少し説明が必要だと思うのですが、イスラーム教徒の間では社会主義時代に低下の傾向があったといわれています。

〈富永〉 家族計画が導入されたのですか。

〈松前〉 そういうことではなく、それをそのまま額面通り信じていいのかわからないのですけれども、彼らが言うには、特に私の調査地では、ブルガリアのマジョリティであるキリスト教徒と隣接して同じ村に住んでいたりするのでその中で、先ほどの少なく生んでよく育てるじゃないですけど、子に教育を与えるためには2人くらいが適当だと。もちろんブルガリアの政府の言説としてもあったのですけれども、強制をされたというよりもそれを受け入れていったというのがあって、ただ、そのブルガリアの正教徒も含めて全体の出生率って第一次世界大戦のあとくらいから低いんですね。ブルガリアって。それはなぜかというのはみんな議論しているのですけれども、よくわからないといわれています。

〈富永〉 中絶は OK なの？

〈松前〉 社会主義時代は特に後半期は先ほども言ったように出生率が低いことの方が問題になりましたので非合法になっていまして、非合法といっても一応日本と同じように条件を付けての、ルーマニアのように完全に非合法というわけではないのですが、かなり厳しい条件のもとで母体を守るとかそういう理由では認められるのですけれども。ただ、根掘り葉掘りいろんなことを聞かれて、とても堪えられないようなプロセスをたどるそうなのですが、そこについては女性たちがいうにはやっぱり裏の手というのがあって、それこそ「正式な医師ではなく、民間のそういうところに自分を行った」という話もしています。それで、そういう人がわかって労働キャンプに送られたとか、そういう話があります。もう少しそういった話も聞いてみます。

EU の加盟なんですからひとつの、やはり国境コントロールが少なくとも移動に関しては緩和されますので、それによって確実に移動の数が伸びるという大きな影響はあって。ただ、最初に申しましたように EU の主だった国がブルガリアからの労働移動に関しては制限を設ける猶予期間を続けているので、それが一応、あくまで猶予なので一定期間になっていますから、それが外されたときにどうなっていくかというのがひとつのポイントかなと思います。それで、もうひとつは EU 加盟もそうですけれど、体制転換の中で、彼らにとっては社会主義からの体制転換で起こったマイナスのことが非常に多いと思われるんですね。でも、唯一よかったというか、プラスになったことというのは自由に国境を行き来できる、社会主義時代は全部コントロールされますので、このことだと。彼らにとってそれはまさにこういう風に出稼ぎに出たり、国境を越えられたりすること自体が自分たちが EU に加盟したということを実感できる、ひとつの大きな機会になっていて、ただ、そのことによって先ほどの語りにあったように後から EU に加盟した人間に対しての二級市民的な扱い、見

下されるという、自分たちはあくまで使われる側であるという。EUに加盟したあるいはヨーロッパの一部であることを実感する機会であると同時に、そこにまた差異化の線が引かれる機会でもあるところではもう少しきちんとみていかなければなあ、というのはあります。

〈富永〉 実は1996年あたりでしたか、ダルエサラームのホテルにブルガリア人の楽団がきていてびっくりしたことがあります。こんなところまで出稼ぎに来るんだと！

〈松前〉 ロマですかね。楽団だったらロマかもしれない。

〈富永〉 いや、顔つきは完全に白人でした。

〈松前〉 あら、違いますか。

〈富永〉 それに現代音楽をやっていた。オランダに行った時に気づいたんですが、売春宿の女性には東欧系の人が多い……。

〈松前〉 そうですね。実際にインタビューする人たちがってことではないのですが、噂としてはやっぱりそういう……。

〈富永〉 人身売買。

〈松前〉 はい。あと、性産業というのにはありますけれども。

〈富永〉 それから、女性の出稼ぎを可能としている状況として、ブルガリアの伝統的な社会構造、つまり大家族といった家族形態が関係してはいませんか？社会主義時代に変化したのか、しなかったのか。

〈松前〉 そうですね。今までの指摘であるのは、いわゆる三世同居が伝統的に行われてきて、社会主義の当初というのは少なくとも理念的には個人化をしていく部分もあるので、そうしたものを守るといって保護するというのは社会主義政権にはまったくなかったはずなのですが、途中で申しました、女性が賃金労働に従事するためには結局、保育であるとかそういった設備が全く足りてなくて、祖父母に頼らざるを得ないという、現実的な対応として家族が守られたのだというような分析というのがいまのところは出ています。ただ、それでいいのかということはいま一度検討する余地がありますし。

〈富永〉 それから、今アフリカでも問題になっている頭脳流出という現象が、ブルガリアでも起きていますか？

〈松前〉 そういった問題はあります。村の移動を追っているかぎりは余りないのですが、最初にお話しした全体の移動の数の中にはやはりそうした高学歴の移動、留学からそのまま居ついてしまうというのが多々あるので、そうしたことは問題で、実はちょっと引用したブルガリア政府の戦略というのがやはり流出が続くとこのままでは国として成り立たなくなってしまうということも含めてそこをどう戦略的にやっていくかということがあったものですから、その流出も問題ですし、大規模な流出も問題ですね。

〈富永〉 ただね、頭脳流出というのは悪い面ばかりではなくて、あの人海外に行ってあんなに成功したのだからと非常に頑張る人がでてくるという効果も指摘されているので、マイナスにとられることはないのかもしれないね。

〈杉井〉 戻ってきているようですから。いったん出た人が。

〈八木〉 他には、質問いかがでしょうか。

〈工藤〉 土地感覚みたいなところを教えてくださいたいのですが、出稼ぎというこの事例なんかをみると、親戚とか家族に紹介されてするというふうに想像するのですが、エージェントとかそういうも見られるようなので、どのように出稼ぎ者が外にでているのか、求人情報といいますが、そういったセクターがあるのかというところが気になっています。

〈松前〉 そうですね。必ずしも知人の伝手とか、そういうネットワークだけではなくて、今は途中で言ったようにインターネットでやっていくのですけれども、昔はテレビなんかでなんというのでしょうか、こう、下の方に文字で出て、広告として「うちはこういうのを仲介していますよ」という宣伝を見ていったんだというような人もいますけれども、一方で実のところはやはり、親戚にしても同じ村の人にしても「あの人も同じく出稼ぎに行っている」のだからということはかなり肯定的に、「あの人にできるのだから私にもできる」というところをうんでいるので、直接的な職の斡旋につながらなくとも、近隣であるいは親族の中に出稼ぎ者が出ているというのは、後押しする、国境を越えることから想像するような、なんというか壁を下げるような働きはしているのだろうと思っています。そのあたりは十分に触れられなかったのですけれども、出稼ぎから帰ってきた後に、仕事の話とか、雇い主にどんなに評価されているか、どんなに信頼されているかということと、あと、どれだけお金をもらえるかというのをみんな全部話す、話をそのまま信じてはいけないと言われる人もいますけれど、「あいつの話は半分は聞いておけ」とか言われるのですけれども、出稼ぎに行った人が話をして、みんな一生懸命聞いて伝聞方式で「あの人はあそこに行ってどのくらい稼いだらしい」とか、そういうことが伝わってくなかで、出稼ぎに関しての、特に女性に関しての出稼ぎの壁というのは低くなっていくというのがあると。

〈富永〉 言葉の壁はあるのでしょうか？

〈松前〉 本来であればそこが一番の問題になるはずなのですけれども、全然できずに。できなくて行きます。

〈富永〉 労働者はいいいけれど、ケア労働だとコミュニケーションが必要ですよ。

〈松前〉 基本的には村なので高等教育までは受けていなくても、いわゆる中等教育まで終わっている人。村の中では決して教育としては低くない人たちがやはりケア労働とか。

〈富永〉 英語ができるってこと？

〈松前〉 できません。英語ができるとは限らないのですけれども、日本でいう中高くらいにフランス語とか、ロシア語だとあまり役に立たないのですけれども、外国語は少しやったことはあるという感じですね。

〈富永〉 出稼ぎでもらう給料について、お聞きしてもいいですか？

〈松前〉 すみません。具体的なところをなにも言っていなかったですね。今までは出稼ぎというのは南欧に、ギリシャとかスペイン、イタリアといったところが多かったのですが、なにせ今、いずれの国も大変な経済危機なので北に上がっていて、フランスだとかオランダだとかになっているのですが。なので、少し北も含めてなののですけれども、ケア労働だと一般的に一月1000ユーロくらい。だいたいですね。1000ユーロというと今円高だから、10万円くらいでしょうか。ブルガリアで公務員

として働いて、一か月働いて、良くてそうですね、2、300ユーロ。向こうで生活費として、多少支出をしたとしても、特に住み込みなんかで女性が出稼ぎした場合は、住居費もいらないければ、食費も余ったもの食べたりしていますので、そうするかなりの金額を貯められるということはありませんね。

〈富永〉 ブルガリアはユーロに変わったのですか？

〈松前〉 いえ、まだです。

〈富永〉 ということは、持ち帰った給料は国庫に入るわけでしょう。換金して。

〈松前〉 ユーロ自体はそうですね。

〈富永〉 そうすると国としてはすごいメリットよね。

〈松前〉 それこそフィリピンみたいに。

〈八木〉 なるほどね。国策として。

〈松前〉 そうですね。今のところ季節労働に関してのエージェントの売りは、エージェントがもちろん仲介料を取るというためでもあるのですけれども、ブルガリアの会社を通して支払われるので、フランスやベルギーで働いても、ブルガリアに税金も納めますよという、そういう形になっていて、そこも多分あるのだと思いますけれども、そこを大々的に宣伝しています。

〈八木〉 他には、いかがでしょうか。

〈伊藤〉 出稼ぎへ行行って、社会問題でもあるのですけれど実際は嫁として売られていたというケースはあったりするんですけれどそういったことは。

〈松前〉 そうですね。人身売買としてっていうとそこはまだわたしも追及が足りなあとと思っスルーしてしまっただけなんですけれど。人身売買ではないんですけれど、こういうところに出稼ぎへ行った女性たちにインタビューすると、女性が単身で出稼ぎに行くと、あちらの方と結局恋愛関係になって結婚して、こっちで離婚するとか、あちらで同じように出稼ぎに来ているブルガリアの男性と知り合ってそこで恋愛関係になって離婚にいたるとか、とにかく女性にしる男性にしる、単身で出稼ぎに出た人たちはほとんど離婚すると語るのですが、わたしがインタビューする人は少なくとも、最初に例を出したAさんという人はもともともう破綻状態で行って、今離婚してますけれども、その人以外は離婚していないっていう不思議な現象があって、「じゃあ、だれが離婚したの」と聞くと、「いや、この村の人じゃない」とか言われるんですが、そのあたりがちょっとまだ突き詰められていない部分なんです。

〈富永〉 離婚は合法なの。

〈松前〉 そうです。ただ、ヨーロッパは割とどこでもそうだと思うのですが、手続きが煩雑なので、なかなか…。ただ、さっきの関連でいえばブルガリアの人が流出しすぎてしまって、今度は中国人を農作業員としてブルガリアに入れる計画があるという。

〈八木〉 玉突き状態ですね。

〈松前〉 ベトナムからも一時期、社会主義時代は実はベトナムからブルガリアに来ていたんですが、また来てくれないかとかいう話があるんです。

〈豊山亜季（国立民族学博物館外来研究員）〉 彼女たちは労働で西側に行くことで下の世代への教育、次世代への教育者のために、例えば教育への期待だったりとか。ブルガリア国内においてなんらかの

不安があり、教育も含めて国外へ行くのか、そういう願望もあったりするかのと。

〈松前〉 そこもとても大事なところだと思うのですが、もちろん人にもよるのですが、現時点で出稼ぎに出ている中高年の人たちというのは、あくまで出稼ぎで、移住を向こうにしようという意思はあまりなくて、そういうことを含めてブルガリアの国内に投資をする。しかも、先ほどのお給料を含めて物価格差を利用して、結局あちらで稼いでブルガリアに投資をするということのメリットを非常に意識しているので、子供たちについても西側で教育を受けさせられたら受けさせたいのかもしれないけれど、そこまでの稼ぎはないので、そうなる子供たちに買い与えるアパートとか、まあ、アパートの部屋ですけれど。アパート一個じゃないですけれども。それはブルガリアの国内。しかも、村じゃなくて、都市とかそういうことになりますね。村のように自分たちと同じように過ごしてほしいわけではなくて、都市に家を確保するという。

〈八木〉 まだまだ続きそうなのですが、続きは懇親会の席で…。

〈松前〉 すみません。喋りすぎちゃって。

〈八木〉 いえいえ、私もいろいろ聞きたいことがあります、あとでゆっくりお聞きしたいと思います。今日は本当に有難うございました。